



The Changing Surrogacy Market.

変容する代理出産市場

Interviewee

Mr. Sam Everingham

Q. 簡単に自己紹介をお願いします。

2人の娘がいるゲイの父親で、今年56歳になる。オーストラリアのシドニーに住んでいる。娘たちは12年以上前に、インドでの代理出産と卵子提供によって生まれた。この時、大変な苦労を経験したことが、Growing Families を設立するきっかけになった。公衆衛生の分野の学歴を持ち、社会調査や市場調査の専門家でもある。現在はGrowing Families で、フルタイムで働いている。

自分とパートナーのフィルは、当時住んでいたメルボルンで、インドで代理出産を依頼して家庭を築いたカップルに出会ったことがきっかけで、代理母を探すようになった。インドに渡航して卵子を提供してくれる南アフリカ出身の白人の卵子ドナーを利用することにした。

最初の代理出産は失敗した。早産で双子が生まれ、2人とも死亡した。2人の赤ちゃんが欲しかったので、2回目は、代理母を2人依頼した。クリニックが代理母を選んで、すべてのプロセスを管理してくれた。出産前後に代理母に会ったが、それ以来、代理母とも卵子ドナーとも連絡を取り合っていない。当時のクリニックとはまだ接触しているが、それはこの業界で自分が仕事を継続しているからという理由だけ。

今は、いろいろなことを知っているの
で、同じクリニックを再び選ぶことはない

だろうと断言できる。あのクリニックは、とりわけ移植の回数やドナーの選定などに問題があった。

Q. Growing Families (GF) の設立から、現在までの発展について教えてください。

Growing Families は、2011年に Surrogacy Australia という名称で設立された。主な目的は、代理出産を希望するオーストラリア人の依頼親をサポートすることであった。カンファレンスは非常に人気があった。2014年には、Families Through Surrogacy という新しい組織を設立し、活動範囲を広げた。オーストラリアに加え、イギリス、アメリカ、アイルランド、ヨーロッパの他の地域でもイベントを開催した。2019年に Growing Families にリブランドした。これは、（代理出産だけでなく）卵子提供の分野でも取り扱いが増えていることを反映したものの。

Growing Families には国際諮問委員会があり、四半期に1度会合を開いている。この委員会は外国人に代理出産を提供している様々な国の専門家で構成されている。我々は、変化する国際的な代理出産の状況について話し合い、世界的な動向について調査を行うために定期的に会合を開いている。

現在、Growing Families はカンファレンス、ウェビナー、セミナーを開催し、依頼親との1対1のコンサルテーションも行っている。また、受精卵の輸送も行っている。

Growing Families の主な顧客層は、英語を話す依頼親である。顧客は、次のような内訳になると推測している：

- 異性カップル 55%
- 同性カップル 25%
- 独身女性 10%
- 独身男性 10%



特に女性の多くは子供を持つことを夢見、その夢を実現するために多大な努力をする。相談に訪れた顧客の15%は、そのプロセスの難しさと費用の高さを実感し、最終的にはプロセスを断念する。別の方法で子どもを授かることを選んだり、プロセスを完全にあきらめたりする。資金を使い果たして諦める人もいる。

ここ3、4年、代理出産をする人の数が増えていることを実感している。また、代理出産を希望する人の平均年齢も顕著に上昇していて、40代半ばから50代くらいで、初めて子供を持つことを希望する人が多くなっている。これは、同性愛者の家族形成に対する考え方の変化や、異性愛者の女性の加齢不妊やその他の医学的問題による不妊の反映だ。

推定では、過去10年間で4,000人以上ものカップルとシングルをサポートしてきた。Growing Families がサポートに応じるかどうかを決める要因は複数ある。年齢は重要な要素のひとつ。例えば、依頼親が55歳以上である場合、子供が成長する前に両親が亡くなるかもしれないという懸念から、消極的になる。将来の子供の利益を考慮しなければならない。

Growing Families は、代理出産のプロセスにおける多くの困難な部分（例えば、ウクライナの紛争地域を離れる代理母のサポート、ICUにいる子供や海外で立ち往生している依頼親のサポートなど）に携わっている。赤ちゃんの中には救急搬送が必要な子もいる。ある韓国人カップルは、ウクライナ戦争が始まったとき代理母の出産を迎えた。代理母はウクライナから逃亡し、最終的にポーランドで出産した。そのため、出生証明書には夫婦ではなく代理母の名前が記載されることになった。

Q. Growing Families のネットワークは世界中にどのように広がっていますか？

Growing Families のネットワークは主に口コミで広がった。代理出産の依頼親のための情報が圧倒的に不足していたことから、急速に成長を遂げた。代理出産の依頼親は、ネットの情報を見て一人で行動し、ネットマーケティングの犠牲になっていた。彼/彼女らは新生児の早産や法的問題などに直面していた。このような依頼親は、海外での代理出産のリスクについて、より多くの教育を必要としていた。Growing Families は、欧米各地で代理出産を希望する親のためのイベントを開催し、Zoomでのコンサルティングも行っている。

Q. 世界の代理出産に関する情勢は、年々変化してきていると思います。最近の情勢やトピックスについて教えてください。

Growing Families の活動は、主に外国人が代理出産を依頼できる場所に焦点を当てている。

外国人のための代理出産の法的枠組みがある目的地：

- ・ アメリカ
- ・ カナダ（利他的なモデルのため、代理母の供給が乏しい）
- ・ グルジア（代理母になる女性が少ない。政府は最近、需要が過多のため、近い将来代理出産を中止すると発表した）
- ・ ウクライナ（現在戦争中）
- ・ ギリシャ（地元の女性は代理母にならないので、ほとんどの代理母は外国から連れてきている）
- ・ アルゼンチン（過去12ヶ月で顕著に増加、ブエノスアイレス州には代理出産に有利な法律がある）



- メキシコ（アメリカより手頃な価格と考えられている）

外国人が代理出産を依頼することは可能だが、規制されていない（つまり法的枠組みがない）目的地：

- 北キプロス（特にアイルランド人とイギリス人に人気。地元の女性は代理母にならないので、ほとんどの代理母は外国から連れてきている）
- コロンビア（主にゲイ男性をターゲットにしたもので、代理母の名前が子供の出生証明書に記載される。政府は代理出産を禁止しようと動いている）

代理出産が利他的で、規制があり、自国民のみが利用できる国：

- オーストラリア
- ニュージーランド
- イギリス
- ニュージーランド
- 南アフリカ

現在、最も多い渡航先はアメリカ、カナダ、アルゼンチンで、次いでメキシコとなっている。グルジアでは、これまで多くの人々がこのプログラムに参加してきたが、政府が閉鎖を発表して以来、状況は急速に変化している。ウクライナでは紛争が続いているにもかかわらず、代理出産を依頼している依頼者があり、包括的なサービスを提供しているエージェントもある。

Q. 代理出産へのニーズは、今後も増え続けると思いますか？

特に養子縁組へのアクセスが悪い国ではそうだ。同性婚を合法化する国も増えて

おり、家族をつくろうとする同性カップルが増えている。また、中国の市場も著しく拡大している。タイ、ラオス、カンボジアでは、外国人向け代理出産の闇市場が存在する。もちろん、Growing Families はブラックマーケットには関与していない。

Growing Families では、英語を話す中国籍の顧客や、インドなど他のアジア地域からの依頼親をサポートしている。日本からは、毎年2名ほど手伝っている。多くの顧客は、母国語や母国での情報を簡単に見つけることができない。また、デリケートな問題であることから、自らソーシャルメディアに情報を探しに行くことも少ない。

Q. 今後、新興国の代理出産の動向をどのように見ますか？

圧倒的な需要があり、途上国が外国人向けの代理出産プログラムを閉鎖する結果を招いている。アルゼンチンやコロンビアではいずれ外国人による代理出産が禁止されるだろうと予測している。自国での代理出産がより簡単になり、海外に行く必要性がなくなることを望んでいる。

アメリカは、代理母のスクリーニング審査が厳しく、制度がオープンで受け入れられやすいが、費用が高すぎる。そのため、人々はよりリスクの高い他の目的地へと向かっている。

Q. 代理出産への需要が増えているなか、商業的な代理出産は不可欠だと思いますが、今後、どの国で有償の代理出産が発展する可能性がありますか？ その理由は？

英語圏のウガンダとガーナで新しいプログラムが始まった。どうやらウガンダは、外貨収入を増やす目的でこの慣行を導入しようとしているようだ。



また、カザフスタンとキルギスでは、最近、国内外のゲイや独身男性が代理出産を依頼できる法律が成立した。しかし問題は、この地域では英語があまり通じないことだ。

Q. イギリスの代理出産法の改正について何か最新の情報をお持ちでしたら教えてください。また、コメントがあればお願いします。

英国の法的枠組みについて、入念なレビューが行われた。例えば、代理母の出産後に依頼親が法的な親権を得るための手続きがより簡単になるなど（現在、出生証明書が変更されるまでは代理母が法的な親とみなされ、その手続きには長い時間がかかる）、国内での代理出産に取り組みやすくなるような変更も行われている。国際的なアクセスに関する改革はほとんど行われていないが、市民がよりアクセスしやすくなるような変化はポジティブである。

アイルランドでは、国内での代理出産を合法化し、親権の譲渡を可能にする法律を導入しようとしている。これにより、海外で利他的代理出産を依頼することも可能となり、法的な親として認められることになる。議員たちの間には、商業的な代理出産をサポートすることに消極的な意見があるが、これは女性がお金をもらって子供を身ごもることに対して文化的な抵抗感があることを意味する。

Q. オーストラリアでの代理出産をめぐる最近の議論の状況はどうでしょうか？

最近、ギリシャでオーストラリア人の代理出産依頼者をめぐる危機があった。この事件をきっかけに、オーストラリアでは代理母への補償に関する議論が再燃している。

西オーストラリア州政府は現在、ゲイ男性が代理出産を依頼することを認めていないが、近い将来、これを変更する意向を示している。国外での代理出産の依頼を取り締まる法律は、3つの州で制定されているが、これらの法律が適用されたことはない。ビクトリア州、南オーストラリア州、タスマニア州は（少なくとも書類上は）国外での代理出産に寛容だが、これは居住地のIVFドクターによる。ほとんどのIVFドクターは、外国での代理出産の選択肢について、依頼親に話すことを許されていない。多くの依頼親は、国内で利他的な代理出産を見つけることができず、最終的に、**Growing Families** にアプローチしてくる。

オーストラリアドルで換算すると、外国での代理出産にかかる費用は最低でも8万ドルから10万ドル（アメリカに行く場合は最低20万ドル）。コストがかかるため、人々はコストの安い途上国での選択肢を模索する。

Q. 国連など国際機関における代理出産についての動きはどうでしょうか？何かコメントはありますか？

国連の姿勢についてはよくわからない。ヨーロッパの人権団体は反代理出産を掲げる傾向にある。ハーグは各国間の共通合意を達成しようとしたが、失敗した。

国連やその他の団体が、代理母の搾取や国境を越えた代理母の移動の可能性を強調する報告書を書いている。例えば、アメリカ人の代理母は体重が重すぎてアメリカでは受け入れられず、カナダに移動する。グルジア、キプロス、ギリシャには多くの代理母が送り込まれている。彼女たちは現地の言葉を話せないし、現地でのサポートも十分ではない。



Q.子育てをするゲイカップルにとってのいちばん多い悩み事はどんなことでしょうか。

代理出産を求めるゲイカップルが経験する問題

- ・ 代理出産にかかる費用
- ・ 代理出産の複雑なプロセス（オーストラリアで受精卵を作ったが、受精卵を受け入れてくれる代理母が見つからないなど）
- ・ 代理母との関係のマネジメント
- ・ 海外のクリニックとのコミュニケーション障害
- ・ 出産後、子供の市民権取得のために、何ヶ月も海外で「立ち往生」すること
- ・ ゲイカップルの体外受精に対するメディケアの補助金がないこと

多くのカップルと同じように、ゲイファミリーも崩壊する。しかし、子供を作ることだけに焦点が当てられ、別れる時の子供の親権についての問題は見過ごされがちである。特に子供が海外で生まれた場合、親権争いは法廷で解決しなければならないこともある。

Q.ご自身が子育てに取り込むなかで、これまでの印象深いエピソードなどがあれば教えてください。

子供たちが幼い頃、母乳が欲しかった。授乳中の母親と母乳を求める人々をつなぐ「Milk For Human Babies」というフェイスブックのグループを発見した。メルボルン中を車で走り回り、さまざまな女性から母乳を受け取り、赤ちゃんに与えた。

子供ができたことで、自分とパートナーにはたくさんの喜びがあった。1980年代にカミングアウトしたときは、こんなことが自分にできるとは思ってもみなかった。

Q.ゲイカップルにおける男らしさと子育ての関係は？ ご自身の経験から何か私見はありますか？

自分とパートナーが父親になりたいと告げたとき、家族の間で懐疑的な見方が噴出した。しかし、パートナーが育てる役割なので、大丈夫だとわかっていた。パートナーが所属していたママグループは、学校と同様に、自分たち家族を受け入れてくれ歓迎してくれた。そこに批判はなかった。それは、自分たちが大都市に住み、教育水準の高い地域に住んでいるからだと思う。パートナーは専業主夫で、当初は Growing Families に関わっていたが、現在は関与していない。

他の国では状況は異なるだろう。例えば、アジアの文化ではこういったことは受け入れられにくいかもしれない。イスラム圏出身のゲイカップルを何組か知っているが、彼らはまだ両親にカミングアウトしていないどころか、代理出産で子供を授かったことすら両親に話していないかもしれない。興味深いことに、過去に Growing Families にアプローチしてきた人の中で、「両親が孫を欲しいと望んでいて、その費用を援助してくれる」と言う中国系オーストラリア人の独身男性を何人も見てきた。孫が欲しいという願望は、それを実現するために高額な代理出産の費用を払うことを厭わないほどなのだ。

社会的な考え方の変化により、自分の世代が 40代や 50代で家庭を築いたのとは対照的に、20代後半から 30代前半で家庭を築く若いゲイカップルが増えている。今はタブー視されなくなった。

Q. GF の活動のなかで、政府の意思決定や法律の作成・改訂などに影響を与えたものはありますか？



Growing Families は政府との協議に参加し、メディアとも協力している。学術誌に発表するための研究も行っている。自分はオーストラリアでいくつかの委員会に所属し、複数の州で法改正を提唱している。Surrogacy Australia の理事もつとめている。

Growing Families は依頼親やメディアなどから批判を浴びることがある。代理出産は賛否両論ある分野なので、どっしりと構えていなければならない。ネガティブな経験をしたり、何か問題が起きたりすると、人は常に誰かのせいにしたがるものだ。

Q. その他、重要なこと。

タイの外国人向けの代理出産プログラムの閉鎖に関する見直しの話があったが、それ以上の最新情報を聞いていない。例えば、胚移植のために代理母をラオスに送り、残りのプロセスや出産はタイで管理するといったものだ。Growing Families は 2013 年から 2016 年にかけて、オーストラリア人を含む多くの人々をタイに送り込んでいた。他の発展途上国と比べると、取り決めはよりオープンである傾向があり、代理出産をする側とする側の経済的な格差も（インドなどと比べると）少なかった。取り決めはまだ不透明で曖昧で、信じられないほどの信頼が必要だったが、望めば関係を結ぶことは容易だった。

アフリカにおける外国人向けの代理出産は、いくつかの課題に直面するだろう：

- ガーナとウガンダでは、現地で白人の卵子ドナーにアクセスできない。
- ガーナでは現在、この慣習は文化的に受け入れられていない。文化的な問題をより詳細に評価するために、今年の後半に訪問する予定である。

- ガーナとウガンダは英語を話すか、代理母と依頼親の間の格差が非常に大きい。
- これまでアフリカで代理出産に携わってきた人々のほとんどはアフリカ出身者であったが、ウガンダではアメリカ市場から値崩れしている人々を惹きつけようとしている。
- ゲイの男性は卵子提供者の人種にあまりこだわらない傾向があるが、その寛容さがアフリカのドナーにまで及ぶかどうかはわからない。
- 自分の認識では、ウガンダとガーナには現在、ローカルの卵子提供産業がない（南アフリカにはあるが、白人の卵子が対象）。

(2024 年 2 月)



Mr. Sam Everingham

ゲイの父親で、2011年にインドでの代理出産で生まれた2人の女の子がいる。現在は、Growing Familiesの創設者として、代理出産や卵子提供による出産を希望する親のサポートをしている。メディアのコメンテーターとしても活躍し、代理出産についての記事を多数執筆している。

Growing Families

<https://www.growingfamilies.org/>

論文:

Sam Everingham, Karin Hammarberg, Martyn Stafford-Bell (2015) Intended parents' motivations and information and support needs when seeking extraterritorial compensated surrogacy. Reproductive Biomedicine Online, 31(5), 689-96.

Sam G Everingham, Martyn A Stafford-Bell, Karin Hammarberg (2014) Outcomes of surrogacy undertaken by Australians overseas. 201 (6), 330-333.

Sam G Everingham, Martyn A Stafford-Bell, Karin Hammarberg (2014) Australians' use of surrogacy. Medical Journal of Australia, 201 (5), 270-273.